伝統工芸の発展への提言
―― 輪島市における漆工芸を中心として ――

*How can Japanese **Urushi Art** Survive? :*
*A Case Study on **Wajima-Nuri***

柴田　徳文
Tokubumi Shibata

Abstract:

It is already known that Japanese traditional handcrafts are almost declining. In this article it is discussed that in order to sustain those industries, traditional factory system is helpful.

キーワード：伝統文化　伝統工芸　工房

1．日本の伝統工芸の現状―序にかえて

日本工芸会が文化庁・NHK・朝日新聞社と共同で主催する「日本伝統工芸展」が 2016 年 9 月 21 日より翌年 3 月 19 日の日程で各地を巡って開催されている。工芸の基礎である伝統を把握して父祖伝来の優れた技術を「一層練磨」し「今日の生活に即した新しいものを築きあげる」（『第六十三回　日本伝統工芸展図録』「趣旨」）ことを目的とする、技術の「公募展」[*1]である。これに応募し、しかるべき賞を獲得している作品は、いずれも技術的に卓越したものであり、また美術・芸術的観点からも素晴らしい作品である。

本年度の代表作品の一つである丸山浩明氏の木工作品「蠟引楓造象嵌飾箱」はその形状や表面の美しさもさることながら、その工作の技術の完成度が高く評価されているものである。また松本三千子氏の「蒼海」と名付けられた省胎七宝鉢もその技術は最高の評価に値するものであろう。漆芸の分野でも、中條伊穂理氏の「花鳥文螺鈿漆箱」や中野孝一氏の「蒔絵箱　風船かずら」などは素晴らしい作品である。

しかし拙稿「伝統文化の継承と発展―伝統工芸の将来」[*2]で述べたように、これらの作品は、日本の工芸品に馴染んでいない購入者の関心を引き付ける魅力にあふれているとは言い難い。これらは収納器なり食器なり、またその他の作品の衣服やその他としての用途を兼ね備えたうえでの魅力に満ちているのであろうか。この展示会に応募している作品は、ごく一部のものを除いて、日常用いられる何らかの用途を持つものである。しかし形はそうであっても、すでに道具として用いられることを放棄した品物が、美術的価値、あるいは芸術的価値のみで受け入れられることは、ごく少数の単位では可能かもしれないが、多数となっても可能であるとは思われない。丸山氏の「蠟引楓造象嵌飾箱」などは前述のとおり素晴らしい品物であるので、そのひとつだけの作品は、価値を理解している購入者を得ることが出来るだろうが、収納容器という本来の目的を主とした需要が数多く生まれるとは考えにくい。

このような最高技術を注ぎ込んだいわば芸術作品を離れ、常用の道具として生産される品物としての伝統工芸品の実態はどうであろうか。日本における伝統工芸のうちで、漆工芸の分野を概観して、伝統工芸の発展が可能か否かを探ってみたいと思う。

日本には「伝統的産業」に指定されているとして青山スクエア―で紹介されている漆器産地が 23 か所ある。すこし繁多になるが、挙げてみると、青森県の津軽塗、岩手県の秀衡塗と浄法寺塗、宮城県の鳴子漆器、秋田県の川連漆器、福島県の会津塗、神奈川県の鎌倉彫と小田原漆器、新潟県の村上木彫堆朱と新潟漆器、長野県の木曽漆器、富山県の高岡漆器、石川県の輪島塗と山中漆器と金沢漆器、岐阜県の飛騨春慶塗、福井県の越前漆器と若狭塗、京都府の京漆器、和歌山県の紀州漆器、山口県の大内塗、香川県の香川漆器、そして沖縄県の琉球漆器である。

これらの産地で生産されている作品の多くは、箸、椀、皿、酒器、盆、菓子器、棗、重箱、櫃、屠蘇器それに座卓や衝立などの日用雑器や調度品が主である。しかもこれらの内の多くの物は、日本人の生活様式の変化によって需要が激減しているものである。とは言え中には、たとえば秀衡塗の酒器（ぐい飲みやビールカップ）のように安倍首相によって伊勢志摩サミットでの外国の要人へのプレゼントに用いられたものもあり、新しい需要を掘り起こそうと努力を重ねている物もある。

そのような努力を重ねながらも、漆器産業全体の製造品出荷額等は、1990 年の約 539 億円をピークとして 2001 年には約 202 億円に減少しており、この傾向は現在でも続いている。[*3]　一部の産

地においては、ある程度の売り上げを確保し、現状維持が出来ているように見えるが、決して発展の途にあるようには思えず、遠くない将来消滅する可能性があると思われる。

2. 輪島市における漆芸産業の実態

上述した 23 か所の漆器産地のうち伝統工芸品産業部門で首位に立っている輪島市の状態をみてみよう。

事業所数においては、平成 2 年の 878 事業所から平成 27 年度では 518 事業所へと 41 パーセント減となっている。従業員数から見ると、同じく平成 2 年の 2893 人から平成 27 年の 1378 人へと、52 パーセントもの減員となっている。しかも平成 27 年の数値には、現実にはすでに事業に従事していない技術者も含まれているので、実際はさらに減員が進んでいる。生産額を見ると、バブル期が終焉を迎えた平成 3 年では 180 億円の数値を示しているが､平成 27 年では 42 億円となっており、しかもこれは NHK の連続テレビ小説「まれ」による能登ブームの押し上げ効果によるもので、その前年 26 年度は 39 億円であった。実に 77 パーセント減ということになる。この数値がいかに悲惨なものであるかを、数値の上だけで見てみると、平成 2 年においては、事業所当たりの平均生産額が 2052 万円であったものが、平成 27 年では 810 万円、従業員当たりでは、平成 2 年においては 625 万円から平成 27 年度の 305 万円と半分以下にまで減少している。もちろん先に述べたように従業員数には実際に仕事に携わっていない者も含まれているので、収入はこの数字よりは多少は多くなるかもしれないが、それにしても、この収入で生活を維持することには困難が伴っているであろう。[*4]

では、なぜこのように衰退の一途を辿っているのだろうか。すでに次のようなものがあげられている。すなわち、大量生産・大量消費の経済構造の確立、農村の衰退による原材料確保の困難、生産環境の変化、雇用環境の変化、生活様式の変化、国民の生活用品に対する意識の変化、戦後の家族制度の変化によるもの、などである。[*5]　漆器に関しては、何よりも国民の生活様式の変化が決定的なものであったと考えられる。

国民の生活様式が変化したのであれば、産業側は変化に対応して供給品目を変化させるか、あるいは産業が消滅するかのいずれかしか途はないのであるが、現状はどうであろうか。輪島塗産業の実態を見てみたいと思うが、その方法として輪島漆器販売店がどのような品物を提供しているのかを有力店のホームページで検索してみたい。この方法は安易過ぎるように見えるが、同市の業者が何を売りたいのかを見るには最適の方法だと思う。

まず目に付くのは従来からある什器、酒器の類の物である。



図 1



図 2



図 3



図 4

あるいは茶道具も従前より作られていた。



図 5



図 6



図 7



図 8

家具などの調度品にも漆は用いられている。

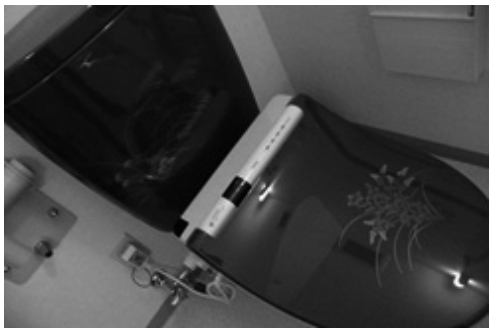


図 9

確かにこれらの作品は素晴らしいものである。しかしこれらは日常生活に必要なものであろうか。多くの人が漆塗りの汁椀で毎朝味噌汁を飲みたいと思っているだろうか。数年に一度あるかないかもはっきりしない場合に備えてこれらを各家庭が購入するだろうか。

輪島の人々の名誉のためにも、現在新しいものを作る努力が重ねられていることを指摘しておきたい。たとえばコーヒーカップ、ティーカップ、またワインカップやぐい飲み、什器酒器以外ではバイオリンや筆記用具などである。



図 10



図 11

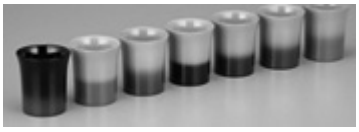


図 12



図 13



図 14

これらの努力は尊いものであるが、さりとて消費者の心をつかんでいるとは言い難い。好みにもよるのであろうが、例えばコーヒーや紅茶、ワイン用のカップは、軽さと断熱性においては優れているが、内容物の色彩を引き立てることにおいては難点がある。コーヒーや紅茶の琥珀色、ワインの黄金色や深い赤色など、漆器では堪能できない。バイオリンに漆を施すことがどれほど楽器の性能を高めるのかよくわからない。しかし一方で、ぐい飲みは消費者ニーズに応えているように思われる一例である。

3. 技術保存の取り組みの一例

上記の指摘はすでに地元で常識となっていることだと思われる。ではなぜそれを理解したうえで業界は衰退の途を突き進んでいるのであろうか。その原因を考察してみたい。

第一番に挙げなければならないのは、それぞれの事業所が長年の歴史を持っていることであろう。親から子へと家業として続いてきたゆえに、従前のやり方を変えることが出来なかったり、また従来のやり方でとりあえず関係者が生活できる、ということがあるのではないか。したがってそこには改革への動機づけが生まれてこないのである。またすでに出来上がっている生産体制や技術に対してこだわりが強くあって変化をさける傾向が生まれるのではないか。

2 番目には、産業の将来が開けていないことによって、人材の新規参入が多くないことである。人材が沢山あればその中からリスクを恐れず新しいものに挑戦する者が現れることがある。将来性に欠けることによって、なかなか後継者が出てこない。

これは漆産業だけではなく、ほとんどの伝統工芸に共通する悩みである。伝統工芸の分野に参入する若者を望見すると、多くの人が、あるいは家業を継ぐ人か、趣味の発展形として志す人かのどちらかであるように見える。後者は従来その産業とは無関係の環境で育ってきたが、製品の美しさなどに魅了されて自身で手掛けてみたくなった人である。前者に属する人は、その業界に参入する人の数においては限界があるが、後者では限りがない。しかし将来性にかけるので、現状ではごくわずかだと言える。若者が一生の仕事として選ぶ場合、先行きを心配するのは当然である。特にこの国においては、男性の場合、自身の生活ばかりではなく、将来の家族の生活についても配慮することが要請されている。前述の統計でみたように、年収平均 300 万円では、一生を託す仕事にはできないのではないか。

最近伝統産業界を管窺するに、新規参入者に女性の割合が多くなったことに気が付く。この現象は、産業の将来性欠如と関係しているように思われる。女性の場合将来の家族の生活を考える必要性が男性よりも少ないように思われる。一生独身を貫いて自分の生活だけ考えればいいという人や、また家族の生活は伴侶にたより、自分は少ない収入をあまり考えなくても良いというひとである。これらの人々が現在伝統産業を受け継ぐことが多くなっているように見える。

とりあえず伝統を継承する人がいることは良いことであるが、心配なことも多くある。それは、上述のような考え方で産業界に入った人々が、生活を伴侶に依存する場合に、伴侶の都合によって離職の必要が出てくることである。その場合継承した技術がそこで途絶えることとなる。男性であれば伴侶の都合により離職しなければならないケースは少ないであろうし、また家族を支えるためにもさらに仕事に精進することになる。

それゆえに、伝統産業を継承発展するためには、以前拙稿で示したように、その産業が従事者の生活を十分支えられるものとすることが必須である。[*6]

そのヒントとなるものを輪島の現場で見ることが出来たので、以下それを紹介してみたい。

その試みは、「工藝立舎」という形で行われている漆工芸に関わる技術を伝える場である。そこでは若い技術者が社会人として「独り立ち」を目指して研鑽している。三階建ての施設で茶室もある。茶道具を作るためには茶道の心も知らなければ形だけの作品になってしまうからだとのことである。茶道ばかりではなく、香道も実践している。道具を作る以上はその用途について知らなければならないとの哲学からである。また輪島市の博物館に収蔵されている什器の修理も行っている。先人の作品に触れて技術を研鑽するために行っている。



図 15　工藝立舎外観　筆者撮影

今一つのものは、「貝桶プロジェクト」と呼ばれるもので、平安時代からおこなわれていた遊戯の「貝覆い（貝合わせ）」の道具の再現プロジェクトである。約 50 名の職人を糾合して漆工芸だけではなく、木工、金工、組みひも、螺鈿、金箔、などを総合して作り上げたものである。このプロジェクトはテレビで紹介された。

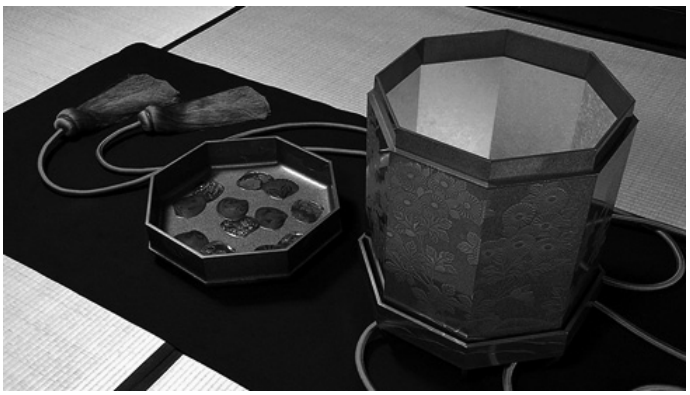


図 16　貝桶（ＮＨＫホームページ「よみがえる超絶技巧　輪島塗・貝桶プロジェクトの２年」から）[*7]

4. 課題と展開―結論にかえて

伝統工芸の将来の発展のためにはどのような製品を目指すべきかについては、既に別稿で述べた。[*8] すなわち相当の収入を見込めるような、世界マーケットに通用する高級消費財を目指すことである。そこでそのような製品を作り出すための工夫を述べてみたい。

上述のような高級消費財をある程度のロットで量産するためには、個人限りでは難しい。そのような製品を生み出せる職人は、最上級の技術を持たなければならない。高級消費財には最高の技術が施されていなければならない。新興工業国が模倣できない技術が必要である。第二には芸術的感性が必要である。いかに技術的に優れていようが、意匠が凡庸では世界では求められない。ヨーロッパ人の購買意欲をそそるデザイン力が必要である。そして最後に、世界でのニーズをつかむ能力である。世界的に流通する品物は、まずヨーロッパで認められなければならない。ヨーロッパで受け入れられれば、アメリカでも売れる。そしてアメリカで売れるものはアラブ世界や中国、東南アジアで求められるようになる。ヨーロッパに受け入れられる、あるいはヨーロッパ人が欲しがる製品を企画できる能力である。この三点が必須である。

しかしながら一人の人物がこれらをすべて持っていることは殆どありえない。どれか一つの能力があればそれで十分通用するのである。三つも持てない。そこでチームワークが必要となる。三つの能力のそれぞれを持っている者たちが協力して一つの製品を作るのである。そのために提唱したいのは、かつて日本で盛んに行われた「工房」による生産である。一つの事業体にそれぞれの能力を持つ人員を集めて工房の製品として生産することである。輪島における「貝桶プロジェクト」はこの工房方式の極致であると思われる。もちろん貝桶のようなビッグプロジェクトは常時行われるものではない。最高の技術者たちが一つの作品を生み出すために無名の職人として協力することにおいては、工房作品と共通するものである。そして工房における技術の伝承の方式として「工藝立舎」での実践が生かされるであろう。

日本の伝統工芸が個人プレーで成り立って行ける時代は終わっているように思われる。根本的な転換が図られなければならない。伝統工芸展に見るような個人の力量に視点を置いた育成方式はまさに動物園で種の保全を図るようなやり方で、種の絶滅に力を貸しているようにしか見えない。

以下は輪島塗製品の図版出典である。（URL は原稿執筆時のものである）

図 1　可ナル舎　http://kanarusha.com/online/sk0005.html
図 2　輪島塗太郎　http://wajimanuri.biz/products/detail.php?product_id=474
図 3　美器穂留都　http://www.wajimanuri.jp/i/1556
図 4　美器穂留都　http://store.shopping.yahoo.co.jp/miki-holz/7091.html
図 5　輪島塗太郎　http://wajimanuri.biz/products/detail.php?product_id=1072
図 6　輪島塗太郎　http://www.wajimanuri.jp/ca/chadougu
図 7　輪島塗漆器 稲忠　http://www.inachu.jp/Jewelbeetle.html
図 8　輪島塗太郎　http://wajimanuri.biz/products/detail.php?product_id=1074
図 9　輪島屋　http://photozou.jp/photo/show/153068/18195544
図 10 輪島塗太郎　http://wajimanuri.biz/products/detail.php?product_id=959
図 11 輪島塗太郎　http://wajimanuri.biz/products/detail.php?product_id=1006

図 12 美器穂留都　http://www.wajimanuri.jp/i/3131
図 13 美器穂留都　http://www.wajimanuri.jp/i/1964
図 14 大徹　http://w2232.nsk.ne.jp/~daitetsu/

＊1　日本工芸会ホームページ、「日本工芸会について」http://www.nihonkogeikai.or.jp/about）
＊2　柴田徳文「伝統文化の継承と発展―伝統工芸の将来」（『アジア・日本研究センター紀要』１０号）　国士舘大学アジア・日本研究センター
＊3　経済産業省ホームページ　「伝統的工芸品産業をめぐる現状と今後の振興施策について」 http://www.meti.go.jp/committee/materials2/downloadfiles/g80825a07j.pdf）
＊4　輪島漆器商工業協同組合統計
＊5　柴田前掲
＊6　前掲
＊7　http://b.hatena.ne.jp/entry/www.nhk.or.jp/docudocu/program/20/2259504/index.html）
＊8　柴田前掲